名前から見るジェンダー観
～名前に込められたジェンダー意識の変遷～

福井県立武生高等学校　佐々木ほほか 森百花 安原七葉 渡邉明莉

Abstract

This study focuses on the diversification of names in recent years, and aims to understand the gender differences in what parents want for their children, leading to the resolution of gender discrimination and prejudice. We investigated the use of kanji in the names of Takefu High School students and graduates, and analyzed the most common origins of each name. Based on this, we conducted a questionnaire and found that there was a decrease in expectations regarding appearance and personal abilities, and an increase in wishes for better personality development and lifelong happiness. In addition, while there were some items in which the wishes contained in naming were significantly different depending on gender, there were also some items in which it could be determined that the gender differences were becoming smaller. From this, it cannot be said that the gender differences in the origins of names have completely disappeared, but it can be said that the differences are becoming smaller. As a future prospect, we would like to study whether there are regional differences in gender views on names by focusing on kanji commonly used in the names of Takefu High School students and comparing them with names of the same age group nationwide.

1.はじめに

近年ジェンダーレスが重視されているにも関わらず、名前における男女差はなくなっていない。名前には親が子どもの成長や人格形成に願うことが顕著に現れていると考えられるため、名前に込められた願いに男女差があるならば、ジェンダーバイアスを形成する要因になっているのではないか。

①先行研究より

ウンサーシュッツ・ジャンカーラ(2023)「日本の名前における変化とジェンダー表象ー子どもの名前は本当に中性化しているのかー」より、日本人の名前とジェンダーを結びつけた研究はすでに行われていることがわかった。一方で、この研究は名前の漢字や音に注目したものであり、由来にまで踏み込んで研究したものはなかった。

そのため「名前」に焦点を当て、使われている漢字や名前の由来を調査することで、親が子供に求める事柄に男女差はあるのかを知り、ジェンダー差別や偏見の解決につなげたいと考えた。また、川岸克己(2024)「人名における漢字使用の変化とその誘因」より、女子の名前では草花をイメージした名前が増えており、男子の名前では男性を表す漢字である「郎」「男」「雄」「夫」のつく名前が減少したことが指摘されている。

②問い・仮説

私達が立てた問いは「名前における親が子供に求める事柄の男女差はどう変化してきたのか」である。

この問いに対して私達は、川岸の先行研究を根拠として、名前自体に変化は見られるものの、名前に見られるジェンダー観、男女差は完全になくなっているわけではない、という仮説を立てた。

2.研究方法

①事前調査

高校生の親世代の平均にあたる1977年～79年出生の武生高校卒業生男子750人・女子635人と、2006年～08年出生の武生高校在校生男子456人・女子447人の名前に使われている漢字、平仮名 、片仮名の使用率を調べる。

次に、最初の調査で10人以上に使われていた漢字を挙げ、「赤ちゃん命名ガイド」を使用して、どのような由来が多いのかを分析した。「赤ちゃん命名ガイド」は

「新漢語林」を基にしているため使用可能と判断した。例えば「百花」という名前には、「百本の花のように美しく育ってほしい」という願いが込められている。

②アンケート調査

事前調査での結果を用いて武生高校1、2年生、保護者、教職員を対象としたアンケートを行った。その結果を分析し、実際にどのような由来が多いのか、その由来に男女差はあるのか、どのように変化しているのかなどを明らかにしていった。

③分析・考察

カイ二乗検定によって分析結果の妥当性について調べた。

3.結果

①事前調査

名前に使われた漢字に込められた願いをキーワードごとに分類することでどのような由来が多いのかを分析した。主に出てきたキーワードは17個で、優しい、賢い、笑顔、強さなどだ。例えば、人を思いやれる人になってほしいという願いならば優しい、美しく可憐な人になってほしいという願いならば魅力、美しいというように分類した。高校生の男女に共通して多く見られると考えられる願いは 明るさ、自由、豊か、の3点だった。

②アンケート調査

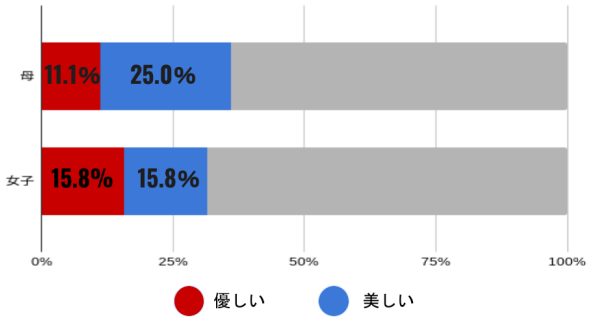
質問した項目は、以下の通りである。

・名前の漢字(ふりがな)
・性別
・学年(年齢)
・名前が決められるうえで最も重要視されたこと
・名前の由来、込められた願い

名前に込められた願いについての質問では、事前調査をもとにして選択肢を作成し、優しい人になること、素直な人になることなど、その他をあわせ20項目から選択してもらう形式をとった。「名前がつけられた際に最も重視されたことはなんですか」という質問には、63.5%の人々が名前をつけられた際に「意味・願い」が最も重視されたと回答した。この結果より、名前の多くが意味や願いに着目しているものであり、今回の研究には意味があると考えられる。

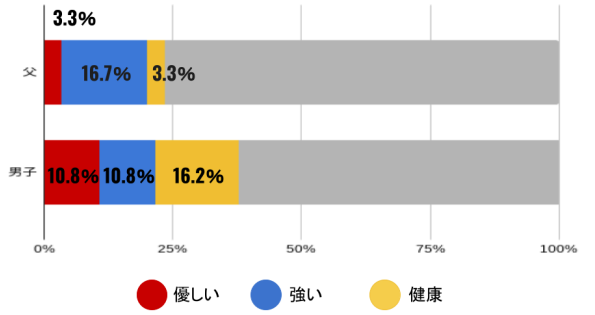
・アンケート結果

図1



Q名前に込められた意味はなんですか(母・女子)

図2



Q名前に込められた意味はなんですか(父・男子)

「自分の名前に込められている願いはなんですか」という質問で、図1より、女性においては「優しい」が4.7%増加、「美しい」が9.7%減少した。図2より、男性は「優しい」が7.5%、「健康」が12.9%増加、「強い」が5.9%減少した。よって、女性に最も多く込められている願いは時代と共に「美しい」から「優しい」に、男性は「強い」から「健康」「優しい」に変化したことが分かる。

4.考察

カイ二乗検定によって、結果として出た差の妥当性について検査した。

②のアンケートで名前に優しいという意味が込められていると回答された高校生女子と親世代女性の人数の差が一番小さかったためこの項目に着目して検定を行った。

・対立仮説「女子と母では名前に込められた優しいという意味において差がある」
・帰無仮説「女子と母とでは名前に込められた優しいという意味において差はない」

この帰無仮説を棄却するためにカイ二乗値を算出し、危険率と比較した。危険率10％、0.349より数字が大きくなるとこの結果は必然となり、数字が小さくなると結果は偶然となる。最終的に得られたデータの数値を足すとX2乗値が0.39になった。

よって、危険率10％の0.349より数値が大きいので帰無仮説を棄却できた。したがって、女子高校生と親世代での「優しい」という項目における変化には妥当性があると言える。今回最も差の小さかった「優しい」の項目で検定を行った結果、その差は必然であるため、これより差の大きい他の項目でも同じ結果になると考えた。そのため、今回の研究の結果は妥当であると言える。

次にアンケートより、女性で「美しい」が減少、「優しい」が増加し、男性で「強い」が減少し「健康」と「優しい」が増加したことから、容姿や潜在的な能力に期待した願いは男女ともに減少し、内面に関する願いや生涯の生活での幸福に関する願いが増加したと言えるのではないかと考えた。また、① ② の研究とアンケート結果を比較すると男女共に共通している「明るさ」「自由」「豊か」の3点に直接的でなくとも関連している願いが増加したと考えられる。「優しい」の項目については、女性で11.1%から15.8％に増加、男性では3.3%から10.8%に増加したことより「優しさ」が男女で共通する重要な人格となったのではないかと考察した。

先行研究を基に男性らしさ、女性らしさへの願いの変化について着目した。高井範子 岡野孝治(2024).「ジェンダー意識に関する検討−男性性・女性性を中心にして−」(2009)より、男性らしさを表す言葉として包容力、たくましい、強いなどが挙げられることがわかった。よって「強さ」が男性で減少したということは「男性らしさ」を願うものが少なくなったと考えられる。

また、女性らしさを表す言葉として上品、気遣い、美しさなどがあるため「美しさ」が女性で減少したことからは「女性らしさ」を願うものが少なくなったと考えられる。

男女ともに共通している言葉として優しさ、心の広さなどが挙げられることから、「優しさ」が男女ともに増加したということは「男性らしさ」「女性らしさ」に関係ない願いが増加したと言えるのではないかと考えた。

5.結論

これらのことから親が子供に求めるものの男女差が完全になくなったとは言えないが、その差は小さくなりつつあることが言える。よって、仮説が立証したと言える。

6.参考文献

・赤ちゃん命名ガイド
https://b-name.jp/
・川岸克己(2013).「人名における漢字使用の変化とその誘因」『安田女子大學紀要 = Journal of Yasuda Women's University / 安田女子大学, 安田女子短期大学 編 (41):2013』41,pp.1-14.
・可知ひろ子(2002).「男・女らしさに関わる意識―大学生を対象に―」『日本教育心理学会総会発表論文集』44,pp.295
・ウンサーシュッツ・ジャンカーラ(2023)「日本の名前における変化とジェンダー表象」『立正大学心理学研究年報』14,pp.9-21.
・安田生命の名前ランキング2024
https://www.meijiyasuda.co.jp/enjoy/ranking/
・高井範子岡野孝治(2009)「ジェンダー意識に関する検討−男性性・女性性を中心にして−」『太成学院大学紀要』11,pp.61-73

7.謝辞

本研究を遂行するに当たり、豊富な知識と経験の下熱心なご指導と適切なご助言を頂いた仁愛大学 西出和彦　教授に厚く御礼申しあげる。